

10代の若い人たちは農業をどう見ているのだろうか——それを知りたくて、大阪府立農芸高等学校(堺市三原区)を訪ねた。9万平方メートルもの広い敷地に田畑や果樹園、牛舎豚舎、食品加工所などいろんな施設が並ぶ。ここでは普通校のような座学ではなく、体を動かしての実践が主体である。モットーは「校内と校外との両方で生徒を育てる」こと。だから野菜を朝市で販売したり、移動動物園を幼稚園でひらいたり、若者たちは積極的に街に出て農業を通じて社会とふれあっていた。

# 実践と協同がもたらすもの

太田 順一 (おおた・じゅんいち)

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校(現・ビジュアルアート専門学校 大阪)卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナンチュ』(ブレンセンター)、『ハルセン 病療養所 百年の居場所』(解放出版社)、『群集のまち』(ブレンセンター)、『父の日記』(ブレンセンター)など。著書に『はくは写真家になる!!』(岩波書店)。

「農芸祭」でのトントンレース。順位を当てるとお菓子がもらえる



「ハイテク農芸科」作物部。トラクターの耕運実習



「食品加工科」応用微生物部。みそづくり



「資源動物科」酪農班

「食品加工科」製菓食品部。店を借り切ってスイーツ、パン、コーヒーの「一日カフェ」をひらく(堺市・泉北三原台)



池島<sup>はやて</sup>颯<sup>きこた</sup>さんと裕田<sup>ひろき</sup>大貴くんは資源動物科・養豚班の3年生。ともに動物好きなこともあって農芸高校に入った。が、ペット感覚の「好き」だけでは通用しなかった。

「今はもう慣れたけど、においがきつくて。最初はええませんでした」(池島)

相手は生きものである。毎日の餌やりは当番制で、休日にも2、3回は学校に出てこなくてはならない。そのうえ解体の実習では、包丁を握って鶏を屠りもする。

「僕ら、いのちを食べてたんだ、って気づくんですね」(裕田)

出産に立ち会った子豚が成長して半年後には肉となる。初めは悲しかったが、しかし今では「自分たちが世話をして売れる豚に育てあげたんだ」との達成感がつのる。

日々の飼育はひとりではできない。班の皆との協力が不可欠だ。そのうえ豚肉の販売実習では、デパートの売り場に立って見知らぬ人に声をかけねばならない。

「人とコミュニケーションする力が身につくんです。この経験は大きいです」(池島)

ハイテク農芸科・野菜部3年の池崎<sup>いけざき</sup>魁<sup>かい</sup>人くんは、人と協同することの楽しさを知ったという。クラスの40人が水田に並んで苗を手植えし、秋には再び全員が並んで手刈りをする。泥んこになって作業に精出すことで、皆が仲良くなっていくのだ。

「おかげで、人前でしゃべるのが苦手だったのに、委員をするようにもなりました」

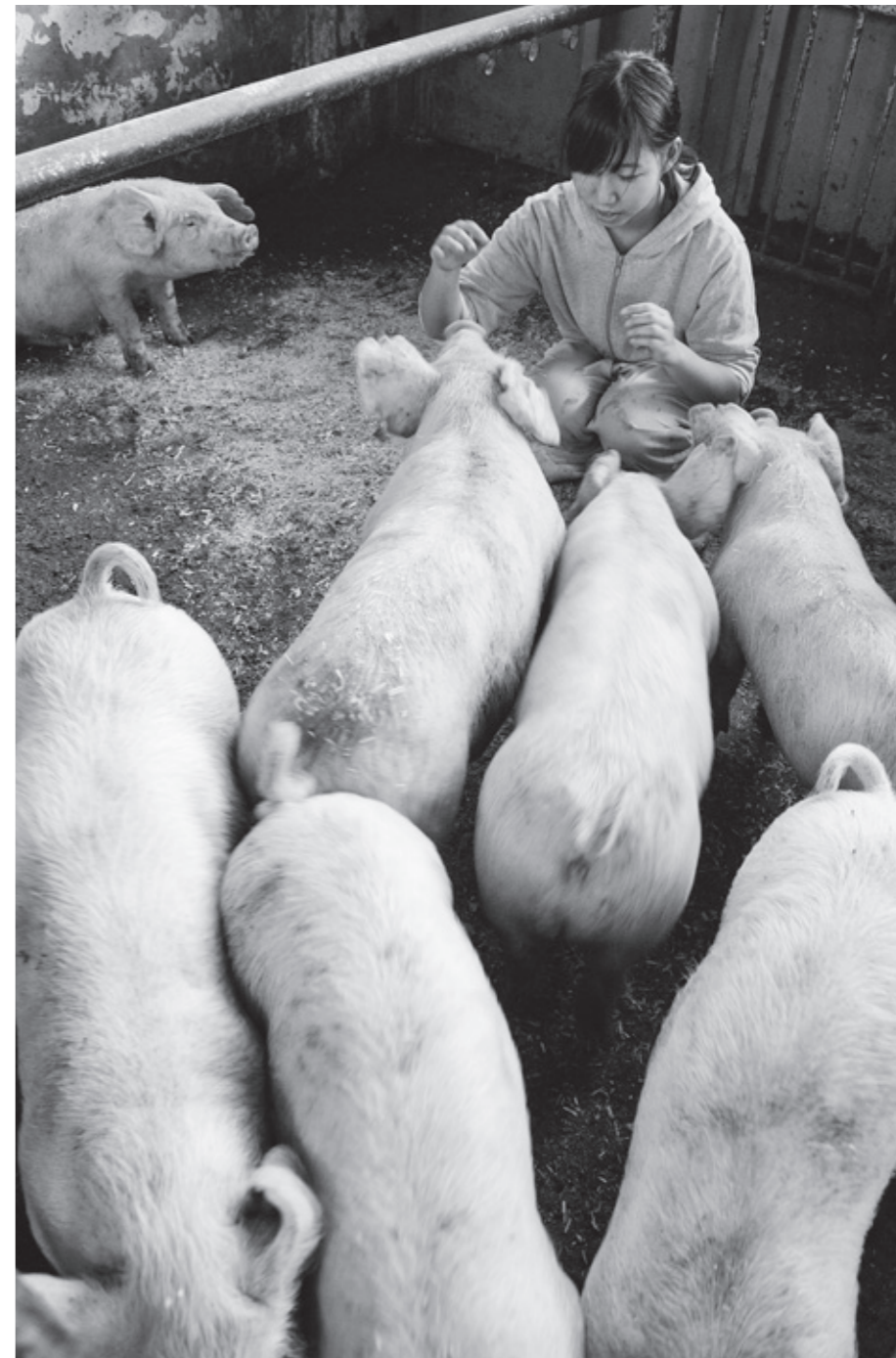
農家の子弟はまれな農芸高校にあって、池崎くんの家は兼業農家。卒業後は農業系の大学に進み、将来は農業人となって高品質な野菜栽培をめざす。祖父が畑で催すトマトなどの野菜の直売会に、いつも長蛇の列ができるのを見てきているからだ。

「スーパーで買うほうが安いはずなのに。しかもお客さんのほうが、おいしい野菜をありがとうって、逆に祖父に礼をいってる。そこに、僕はやりがいを感じるのです」

「資源動物科」養豚班。豚肉の解体実習



豚舎での餌やり



商標登録してある「農芸ポーク」の販売実習(泉北高島屋)